

“魂”との往復書簡

論文内容の要旨

東京藝術大学大学院美術研究科

博士後期課程美術専攻油画研究領域（油画）

1316907 濱田香織

〈無痛の痛覚〉が呼び起こす風景

日々の営みのなかで、なにか、途方もない心的打撃を受けたとき、「言葉を失う」「言葉もない」「絶句した」などと表現することがある。

わたしはこれらの表現に出会うたび、強い違和を感じてきた。言葉がありません、と口にするくらいなら、最後まで黙っていればいいのに——という苦い感情が、とどめようもなく、身の内に湧き上がるのだ。

が、にもかかわらず、わたし自身このようなもの言いをしたことがない、と言い切ることも、また出来ない。そのことに対する恥に似た感情も、苦さのうちには確かに含まれている、と思う。「沈黙」の表明自体が“言葉にならない何か”を貶めるように感じ、その行為を自分は黙認した、許したのだという、罪の意識が生まれるためかもしれない。

わたしがみずからの作品、思想（あるいは思想的なるもの）を語ることによって発生する避けがたい傷、ずれ、振れは、これらの言葉が抱える矛盾に極めて近い性質を持っていると思われる。そのことを、まず初めに確認しておく必要があるだろう。自作あるいは自身を分析するとは、ある種不毛な試みである、と言ってよいのではないだろうか。なぜなら、わたしにとっての絵画とは、絶えず流動する“魂”そのものであり、そのなかで、描くわたしは自他未分かつ、他ならぬ「わたし」として、呼吸しているからだ。

禅に通じる東洋的な思想であると述べることも出来ようし、C. G. ユング（1875 - 1961）の言う無意識の働き¹に関連づけて語ることも可能だろう。あるいは、複雑系と名づける立場もあるかもしれない。しかし最終的には、言語化が非常に困難な領域である、と結論を留保せざるを得ないはずである。

こう述べることも出来る。絵画には、量的研究の域からは確実に零れ落ちるであろう、いや如何なる質的調査によっても浮かび上がらせることの困難な肉体の記憶が、楔のように、繰り返し打ち込まれる。それが分析、解剖を困難にするのだ、と。なぜ、困難なのか。ひとりの人間の肉体の記憶は、生きとし生けるもの、無生物にいたるまで、すべてのものたちの記憶と、不可分であるからである。絵画という場では、記憶を「分ける」ことはできない。つまり、打ち込まれる楔の先端は、確かに「切り分けられた個」、すなわち「作家そのひとだけの」記憶の様相を呈しているかにみえるが、凝視すればするほど、フラクタル構造を有し移動し続ける菌類の形状にも似て、全体像の把握が難しくなるのである。そして、解剖しようとする対象が、今まさに「生きて、動き続けている」という問題もある。解剖とは、「死者」を対象とするものだ。流動する“魂”においては、「死者」は存在しない。逆に言えば、“魂”を「死者」とし、解剖してはならないのである。

絵を描くことは、解剖し、名を与えることではない。動き続ける“魂”をとくに見失いながら、〈共に生きる〉努力にほかならない。わたしはその過程で、〈無痛の痛覚〉とでも言うべき場所を発見する。その痕跡のすべてが「わたしの絵画」である、と言える。

絵を描く自身と言葉の関わりを真剣に考えようとする時、真っ先にここに浮かぶ詩人がいる。石原吉郎（1915 - 1977）。彼の語る「詩の定義」は、わたしにとっての「絵画の定義」として、そのまま受け入れることが出来るものだ。

ただ私には、私なりの答えがある。詩は、「書くまい」とする衝動なのだ。このいいかたは唐突であるかもしれない。だが、この衝動が私を駆って、詩におもむかせたことは事実である。詩における言葉はいわば沈黙を語るためのことば、「沈黙するための」ことばであるといつていい。もっとも耐えがたいものを語ろうとする衝動が、このような不幸な機能を、ことばに課したと考えることができる。いわば失語の一步手前でふみとどまろうとする意志が、詩の全体をささえるのである。²

*

では、〈無痛の痛覚〉とは何か。

本論では、身体の内にも外にもひろがる“魂”と手紙のやりとりをするように、わたしの個人的な記憶と他者の〈痛み〉を辿ることで、それを明らかにしていきたいと思う。他者ところを通わせるとはどういうことなのか、作品をつくるとはどのようなことなのか、という、自身にとって最も基本的な問いをみつめ、こたえにつながる新たな問いを得ることが出来たらよいと思う。

他我の壁がふとした瞬間に失われる自身の性質は、明瞭にすべき責任の所在を曖昧にする。わたしの創作の根本が、「他者の〈痛み〉への共感」のみならず「暴力」を生む温床として存在しているという事実と可能なかぎり冷静に向き合い、その痕跡が、みずからの「位置」に立つための縁^{よすが}として生きるような思索となることを願っている。

¹ C. G. ユング『ユング自伝』、A. ヤッフエ編、河合隼雄 藤縄 昭 出井淑子 共訳、みすず書房、1976（参考）

² 石原吉郎『石原吉郎詩文集』、講談社、2013、p.11